

北海道とアイヌと観光と



本田 巨克*

本年6月13日、北海道にとっても、アイヌ民族にとっても、大きな意義を持つ閣議決定が行われました。

民族共生の象徴となる空間の整備に関する基本方針が閣議決定されたのです。

アイヌの歴史や文化等に関する展示・調査研究や、アイヌ文化の伝承、人材育成、体験交流、情報発信等の役割を担う施設として、白老町に、国立のアイヌ文化博物館（仮称）と国立の民族共生公園（仮称）を整備するというものです。

また、過去に発掘・収集され現在全国各地の大学に保管されているアイヌの人々の遺骨等を象徴空間に集約し、アイヌの人々による尊厳ある慰霊が可能となるよう、慰霊・管理のための施設を設置することも決定されました。

象徴空間は、民族の祭典とも称されるオリンピック・パラリンピック東京大会の開催に合わせ一般公開されることとなりました。

振り返ると、平成9年にアイヌ文化振興法が制定され、アイヌ文化の振興やアイヌの伝統等に関する普及啓発活動など様々な取組が進められてきました。

そうした中、平成19年に国連総会で「先住民族の権利に関する国際連合宣言」が採択され、さらに翌20年には、衆参両院で「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」が採択されました。

このような状況の変化を受け、平成21年、「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会」が今後のアイヌ政策の「扇の要」となるものとして提言したのが、民族共生の象徴となる空間の整備でした。その政策が遂に具体化を見ることになったわけです。

象徴空間の整備に当たっては検討・整理が必要な課題等が数多く残されていることと思いますが、2020年に向けて、関係者の方々の熱意を集約し、すばらしい施設が作られることを念願しています。

もう一つ、アイヌの話題です。現在、国、地方公共団体、大学、民間団体等が連携して、「イランカラ

テ」キャンペーンを推進しています。イランカラプテとは、アイヌ語で「こんにちは」を意味するあいさつです。萱野茂さんは、この言葉を「あなたの心にそっと触れさせていただきます」という意味に解釈されたそうです。大変、味わいのある言葉ですね。

イランカラプテを北海道のおもてなしの合言葉として普及させ、来道者へのおもてなし向上と、アイヌ文化への理解と関心を深めてもらおうというのが、キャンペーンの趣旨です。研究所でも、来所者をイランカラプテの精神でおもてなししませんか。

話は変わって、観光です。

昨年、我が国を訪れる外国人旅行者が1000万人を突破しました。今後は、2000万人の高みを目指して外客誘致を促進するとのことでした。

北海道も、昨年の外国人旅行者が100万人を突破したとのことでした。北海道は、我が国の外客受入の10%を担うとの目標を掲げているので、今後は、200万人を目指して行くことになるのでしょうか。

北海道は、東アジアの人々から大変人気の高い観光地です。各種のアンケート調査を見ても、北海道は、東京、富士山と並んで、行ってみたい観光地のトップ3にランクしています。100万人、200万人どころではない、膨大な潜在的需要があるのです。

今後のアジア地域の成長可能性も勘案すれば、質の高い観光資源や体験を求める外国人観光客が数百万人の単位で北海道を訪れるようになるのも遠い将来ではないかもしれません。

アイヌ政策も外客誘致も、北海道にとって、また我が国にとっても大きな課題です。

アイヌ民族をはじめとする多様な民族が、この北海道の大地で、互いの文化や伝統等を尊重し合い、豊かで活力あふれる社会を築いていく——そしてその姿が民族共生の一つのモデルとして国際社会で認知され、さらに多くの外国人を呼び寄せる。そんな将来を夢想しつつ、当研究所の関与のあり方について思案する次第です。

(独)土木研究所 寒地土木研究所 監査役*